

## 下つ卷 仁徳天皇

## 三、八田若郎女

一、御綱柏 みつなかしは ミツナカシハは豊 とよのあかり 樂の料で、酒や飯を盛るに用いる柏の葉。豊 とよのあかり 樂は豊 とよのあかり 明とも記し、現宮中の主宴会場も豊明殿と呼んでいる。

二、八田若郎女 やたのわきいらつめ 宇遅能和紀郎子の妹、仁徳にとっては異母妹にあたる。（応神の系譜（一五七頁）参照）

三、積み盈てて 「記伝」に「盈 みと云るおもしろし、所思 おもほしめす看まゝに柏多く取得 り給ひて、御不足 みあかぬ こと無く、殊に御心 よゆうし 歛 よゆうしばしく還り来坐る御さま見えたり」とある。

四、仕丁 よぼう 官に徴発された人夫。

五、倉人女 くらひとめ 「記伝」には「此名称 ナニ此より外に古書に見あたらず。後に女蔵人と云物ならむか、…… 但し其は後の事とおぼしければ、蔵 くらのかみ 司 くらのかみの内の女なるべきか」とある。

後宮職員令「蔵司」の条には、女蔵人は天皇・皇后の衣服のこと、その他つかさどる処で、尚蔵（一人）、典蔵（二人）、掌蔵（四人）の下に女孺 めわらわめ十人が配されている。倉人女はその女孺であろうか。大后の供をしていることから「蔵司」の要員として天皇の側近に仕える女であったことは確かであろう。

六、御津前 みつのみさき ミツナカシハ（御綱柏）をミツノサキ（御津前）にかけ合わせて地名説話をなしている。また御津は、左に掲げる歌の通り、万葉にもしばしば歌われた舟泊りである。○（万八・一四五三）「難波 なにはがた 瀉 みつ 御津 さきの崎より 大船 おほぶねに ま梶 かぢしじ貫 ぬき 白波 しろなみの 高 たかき荒波 あるみを …」（難波瀉の御津の崎から、大船の両舷に楫をいっぱい通し、白波の高く立つ荒波を…）○（万一・六三）「いざ子ども 早く やまと日本へ 大伴の 御津 みつの浜松 待ち恋 こひひぬらむ」（さあ皆の者、早く大和国へ帰ろう。大伴の御津の浜松が待ちわびているだろう）○（万一・六八）「大伴の 三津 みつの浜なる 忘れ貝 わすれがい 家なる妹を 忘れて思 おもへや」（大伴の御津の浜にある忘れ貝、その名のように、家にある妻を思い忘れることがあるだろうか）

なお、三津を御津と呼ぶのは官船の舟泊りであったためだろうと多く解かれている。

七、その御船を引き避ぎて 御船を綱で引張る（引張って）。

八、堀江に浜り、河の隨に 此処のくだりは、「大后はそのまま高津の宮にはお戻りにならず、御船を綱で引き、宮を避けて難波の堀江をさかのぼり、淀川から山代河（木津川）を通って、山代（山城）の国へと上って行かれた。」という意味合いになるうか。尚、「記伝」には「随とは、此時何処へと指て幸すには非ず、ただ難波宮を避賜ふぞ御心なる。故に何処にとなくただ河の隨に上坐て、おのづから山代には到坐るなり」とある。正に「足もあがかに」嫉んだ大后の心情が彷彿とする。

九、宮上り 我が上れば 難波宮をやりすこして河を上り、私がさかのぼっていくと  
（「記伝」の釈意）

十、あをによし奈良を過ぎ アヲニヨシは奈良にかかる枕詞。ヨシは詠歎の助詞。ヨシに係る万葉の用例を左に掲げておく。

○（万二・二二〇）「玉藻よし 讚岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか こだ貴き……」（玉藻よし讚の国は、国がらのせいが見ても飽きることがなく、神の御心によってこんなにも貴い……）

十一、小楯 倭を過ぎ 我が見が欲し国は云々 この項を口訳すると「私の見たいと思うのは、奈良山を過ぎ倭を過ぎ、そのかなたなる葛城高宮の我が家のあたりだ」となる。

十二、筒木 山城國綴喜郷の地。万葉に「あをによし奈良山越えて 山背の管木の原ちはやぶる 宇治の渡り岡の屋の 阿後尼の原を 千歳に 欠くることなく 万代に あり通はむ」と山科の 石田の社の 皇神に 幣取り向けて 我は越え行く 逢坂山を」（万十三・三三三六）（あをによし奈良山を越えて、山背の管木の原、ちはやぶる宇治川の渡り 岡の屋の阿後尼の原を、千年までも欠けることなく万代までも通い続けようと、山科の石田の社の神に幣を手向けて、私は越えて行く、逢坂山を。）とあり、奈良山とツツキとの関連を示唆している。

十三、御諸の その高城なる 大猪子が原 云々 ミモロは神の鎮まるところの意。三輪のミモロを始め、各地にある。森にもとづく語であろう。先の「い及け鳥山」の歌は、

使いを急がせていう口調が切迫していて、短歌型なのに強い速度感がある。この「御諸」の歌は、一種の「語呂合わせ」になっていて、「原」から「腹、肝、心」とつづいている。「つぎねふ」の歌では「腕を巻いて共寝した仲ではないか」と訴えているので、本来は民謡であつたと思われる。

十四、山代の筒木の宮に物申す云々 前段に「筒木の韓人、名は奴理能美の家に入り坐しき」といったのに、ここでは「筒木の宮」とあるのは「記伝」が指摘するように大后がいるからである。安康の段に「臣連の王の宮に隠ることは聞けど、未だ王子の臣が家に隠りまししことを聞かず」とあるによつてもわかるように、「宮」と「家」は使いわけられていた。

さてこの一首は、山城の筒木の宮で大后にもものを申し上げている我が兄を見ると、涙がこぼれそうになるという意だが、この「涙ぐましも」を呼び出したのはさきのニハタヅミ（水潦）という語であろう。万葉に「……ニハタヅミ流るる涙留めかねつも」（万十九・四二二四）（にはたづみ流るる涙を留められません）。また、「み立たしの島を見る時ニハタヅミ流るる涙止めそかねつる」（万二一・一七八）（皇子が立つておられる庭園を見ていると、雨水のように溢れ流れる涙を止めかねる）などとあるとおり、ニハタヅミは涙にかかる枕詞であつたからである。

了